



八 仕事 II

「そんなもので、俺の心が癒されるのか。金を払う価値があるのか」

いきなり罵倒する攻撃的な言動。相手の心は既に噴火状態だ。こうした状況で、果たして、冷静に仕事ができるのか。美里の心に一瞬、不安がよぎる。だが、その不安は相手には決して見せない。ハートケア士の資格を活かすために、この仕事に就いたのだ。

ハートケア士になるための授業では、落ち着きのない相手や逆上しそうな相手への対応すべき方法を理論でも学習したし、学生同士でも訓練を行った。例えば、対応困難客を交代で演じて、相手を癒す練習だ。しかし、所詮、訓練は訓練。学生同士ではどんなに激情しても、それは役を演じているだけだ。最終的なところでは、相手を慮ってしまう。

そのため、学生同士だけでの実習に留まらずに、ボランティアとして、病院や老人ホームなどでも入院患者などを対象に、傾聴などに努めてきた。つもりだった。だが、実際にハートケアの仕事をやってみると、ごく普通の人の心の中は、これほどまでに嫌味で、悪臭が漂い、へどの味がして、ただれているとは思わなかった。

当初は、別の惑星の人ではないかと思ったが、後から聞くと、同じ地球人らしい。これでは、とてもじゃないけれど、心が通いそうにない。単なる、生きる上で生じた産業廃棄物のような怒りや憎悪などのゴミの感情をハートケア士にぶつけているだけだ。

これなら、他の惑星のゾウ星人やカツオ星人、ハト星人の方が、だいぶやさしいし、心が通えるだろう。たぶん、互いに異星人ということを知っていれば、ワンクッションがあるため、互いに何とかしようという気持ちが働くのかもしれない。

それに比べて、地球人同士は、わかりあえて当然、わかろうとしないのは自分じゃなくて、相手のせいだと決めつけている。そして、ケアされているにもかかわらず、そこに金銭、費用が介在することで、客の方が上から目線や上位の立場からの発言や態度を示しがちになる。

だが、それは違う。人は一人では生きられない。他人と交流をすることで人となるのだ。その他人と交流する手段として、信頼に裏付けられたサービスがある。お金もサービスの一種であり、美里たちが行っている心のケアもサービスの一種なのだ。つまり、お互いにそのサービスの一種を交換しているだけなのだ。

それじゃあ、ボランティアはどうなのか。無償だし、受ける方は受けっぱなしで、提供する側

は提供しっぱなしで、交換はないと思うかもしれない。しかし、ボランティアも交換の一種だ。

受ける側は、提供する側に感謝し、提供する側は、受ける側から感謝されることで、満足感を得るとともに、自らの存在意義を肯定されるのだ。感謝しない人もいるかもしれない。それでも、自己満足のためにサービスを提供するし、もし、自己満足もできなくなれば、サービスは提供しなくなる。そうなれば、そこでサービスの交換は終わる。やはり、人は人同士で、何らかの形で交換をしていることになる。

ここで、交換をやめるか、続けるか。美里は考える。だが、相手は、こちらを煽るものの、交換を止めようとは言っていない。ハートケアの学校の教師からも事務所の支配人からも、いくら口先だけで、拒否をするような振る舞いをしようと、相手から交換を拒否されない限りは、心のケアを続けなさいとの指導を受けていた。

「それじゃあ、準備をします」

美里は自分の人差し指にサックをつけると、相手の指にもサックを付けようとする。

「だから、俺はあんたを信用していないんだ」

相手は口では拒絶をするものの、美里の行動には拒絶はしない。美里は何も言わずに、淡々とサックを相手の指に装着した。

「それでは始めます」

相手からの承諾の返事はない。だが、拒否する様子もない。あれほど騒いでいたにも関わらず、今は大人しく、美里にされるがままだ。ただ、黙って、美里の方を向いている。多分、様子を伺っているのだろう。

人差し指が触れる。美里は眼をつぶる。男の頭の中は、もやもやとした視界ゼロパーセントの霧だ。それでも、美里の意思はそこを突き抜けていく。次第に、靄が、霧が晴れてきた。意志の目は大きく開かずに、細める。その方が輪郭をはっきりと掴めるからだ。

そこには、あの客の男がいた。椅子に座っていた。顔を手で隠している。泣いているのか。美里の意思が近づく。男の前に立つ。嗚咽している。声を出さないようにはしているものの、唇と手の隙間から、涙声が漏れている。美里の意思はしゃがむ。自分の視線を男よりも低くする。下から見上げながら尋ねた。

「どうしたの」

事務的な言葉ではない。母なる声だ。母性が満ち溢れたやさしい声だ。男は答えない。ただ、声を詰まらせて泣くだけだ。美里の意思は、男の両ひざに手を置く。温かい。美里の意思も温かいはずだ。

「どうしたの。泣いていたんじゃ、わからないわ」

再び、男に穏やかに問い掛ける。男の泣き声が止まった。顔を覆っていた手の隙間から美里の意思を見る。美里もその隙間から男の顔を見る。先ほどの怒鳴り散らした、いきがっていた顔ではない。子どもの顔つきだ。体つきも小さくなっている。

「お母さんがいなくなった」

男は声変わりする前の声で呟いた。

「そうなの。だから、寂しくて泣いているのね」

「うん」

素直な返事だ。男はしゃべればしゃべるほど、幼くなる。

「大丈夫。あたしがいるわ」

美里の意思は男の手を握り締める。男の顔は、大人から少年、そして幼児の顔になった。

「お母さんはすぐに帰って来るわ」

「うん」

幼児は頷く。

「それまでの間、一緒に遊びましょう」

美里の意思は立ち上がる。幼児の手はつないだままだ。だが、幼児は椅子から降りようとはしない。あせらない。美里の意思は呟く。相手が動くまで動かない。無理に動こうとすれば、頑なになるだけだ。自分に言い聞かせる。美里の意思は幼児の手を握り締め続けた。

「ママ」

突然、幼児が喜びの声を発した。

美里の意思はその声が向かった先を見る。そこには女が立っていた。髪が長く、顔立ちは菩薩のように柔和な笑みを浮かべている。服装はピンクの薄いセーターに、白いスカートだ。足下には黒いパンプスを履いている。

幼児は椅子から飛び降り、美里の意思の手を素早く離すと女の元に転がるように走っていった。まさに、今まで泣いていた子はどこに行ったのか、というようなはしゃぎぶりだ。

「そんなに急いだら危ないわよ」

女は駆け寄ってきた幼児を胸で抱きしめた。そして、美里の意思の方に向いて

「ありがとうございました。この子の面倒を見てくださって」

と、頭を下げた。

「いいえ。ほんの少しの時間です」

幼児は女の手を握り、振り子のように大きく振っている。手を離すと、今度は女の体の周りを右周り、左周りとぐるぐると回る。まさに、子ザルが母ザルに、子犬が母犬にまとわりついているようだ。その間も、女は男の子の頭を撫で続けている。時には、愛おしそうに、指で髪の毛を掬っている。手の隙間から男の子の髪が流れた。

「それじゃあ、私たちは家に帰ります」

女が再び頭を下げた。

「バイバイは？」

男の子は驚いたように美里の意思の方を見た。母に会った嬉しさから、美里の意思の存在をすっかりと忘れていたのだ。男の子は顔を上げ、女の顔を確認すると、美里の意思の方に向って、さっきまで、手を繋いでいた手を手首から左右に振る。バイバイ、と。

「さようなら」

美里の意思は女と男の子に向って手を振った。女と男の子は手を握り締め、その場から立ち去った。その後姿を見つめる美里の意思。二人の後姿が次第に変化していく。女は髪の毛が白くなり、体は次第に小さくなっていく。反対に、男の子は背が伸び、骨格がしっかりとなっていく。そして、青年となり、中年になった。

その中年が振り返った。美里を指名した客だ。最初に出会った時のような嫌味な顔はなく、誠実な大人の顔に見えた。その誠実が頭を下げた。美里の意思も礼をした。

人差し指が離れた。

目の前には、本物の肉体を持った客。そして、本物の肉体を持った美里。互いに見つめあう。

「母親が最近、亡くなったのです。遠く離れて住んでいたもので、普段会うことは少なく、また、親孝行もできませんでした。だから、そんな自分を責めて、何かにいら立っていたのかもしれない。おかげで、心が落ち着いたような気がします。ありがとうございました」

男は美里の目を見ずに、部屋のジュータンを見つめながらしゃべる。美里に話を聞いてもらいたいのではなく、自分に対して納得させるような話振りだった。そして、話し終わると、ソファーに深く座り、背もたれに体を委ねると、疲れたのか、目を瞑った。

「こちらこそ、ありがとうございました」

美里は身支度を整える。今回のお客さんは、お客さんの要望で、特段のコスチュームを着る必要はなく、普段の服装で対応した。後から分かったが、お客さんは美里の姿に若かりし頃の母親を見ていたのだろう。

だが、美里にとっては、本当は、シンデレラでも、赤ずきんでも、かぐや姫でも、コスチュームを着た方がいい。普段の服装だと、素の自分が出てしまうからだ。

美里も当初は、以前、事務所で暴れたタコ星人のように、コスチュームを着ることに抵抗やためらいがあった。だが、今は、違う。服装を変えることで、お客さんが心を開きやすくなるだけでなく、ハートケア士もハートケア士としての自覚を持つことができるのだ。

そう言う意味では、この店のコスチュームを身に着けるシステムは理にかなっている。

美里は男の母親と同じ、ピンクのセーターと白いスカート、黒いパンプスの服装のまま、事務所に連絡する。

「今、終わりました。帰ります」

「お疲れ様」

仕事が終わった後は、店に連絡すると、支配人が必ず、電話に出る。ハートケア士の安否を確認するためだ。それは、肉体的な安否だけではなく、精神的な安否も含めてなのだ。支配人の管理監督意識が強いからなのか。

嫌な言い方をすれば、美里たちハートケア士は鵜飼の鵜であり、支配人はそれを操る鵜匠なのかもしれない。でも、今でも、鵜飼なんてやっているのだろうか。この素朴な漁が、他の惑星の人たちには人気で、観光資源として流行っているというニュースを聞いたことはある。特に、鵜によく似た星人や川魚によく似た星人には、自分たちが主人公になっているようで静かな人気だそうだ。人の気持ちはよくわからないものだ。

「また、指名してもいいですか」

大人しくなったお客さんは美里の店への連絡が終わると話し掛けてきた。

「ありがとうございます」

イエスともノーとも答えない。お客さんの相手を決めるのは美里ではない。支配人が決めるのだ。今から迎えの車に乗り込み、ヘッドフォンを被る。今日あった出来事の記憶が全てヘッドフォンに記憶される。そうすることで、美里たちの負担は軽減される。

そして、その記憶されたヘッドフォンは支配人の手に渡り、客の情報として全て集められ、再び、同じ客が予約した場合に、誰が一番適しているかを選択するのだ。

美里の心に、脳に、お客さんに対するNGな気持ちがあれば、指名から外してもらえる。この店では、お客さんと美里たちのハートケア士の深いつきあいを望んではいない。関係が深まれば深まるほど、トラブルも発生しやすくなるからだ。

「それでは失礼します」

美里はホテルの部屋から出ていった。もう後ろは振り返らなかった。

